

大学の図書館カウンターでアルバイト中、
花の絵が描かれた菜と暗号のようなメモを見つけた二人は……

菜と嘘の暗号 第三回

「あつた!」

思わず声を出してしまい、慌てて周りを見回した。新聞が保管されている第2書庫はしんと静まり返っていて、誰もいない。けれどドア一枚向こうはサイレントエリアで、今も多くの学生が机に向かって勉強している。

ドアのガラス越しにそつと、誰もこちらを気にしていないことを確認して、目の前に新聞の束に向き直った。

この書庫の新聞……原紙は、半月分まとめて束にして、紐で縛って保管されている。書架に貼ってある新聞紙名と発行年の掲示を頼りに目当ての記事を探すと、ちょうどその記事の部分に菜とメモが挟まっていた。

「紙面の数字も、メモしてきてよかつたな」

二十面以上あるものを、一枚ずつ確認していくのはなかなかの手間だ。それでも、ここにある十種類以上の新聞を一枚ずつめくっていきよりは遥かにマシだろう。

今度の菜には白い花が描かれていた。真ん中が黄色で花弁が白く、コスモスに似ているが形が少し違う気がする。

「そして暗号はこれ……か」

本のタイトルのようだが、やはり長い。友達が読んでいたラノベのタイトルみただ。けれど、これならOPACに入れば一発で見つかりそうだ。いくつか書いてある数字の意味はよくわからないが、4桁の数字はたぶん出版年だろう。

「よし」

メモはポケットに入れて、まずは新聞を紐で結びなおして元の場所に戻す。

カウンターに戻って先輩に相談

するまでもない。このまま書庫に探しに行けばいい。

自分のスマホを取り出して、弘大図書館のウェブサイトでOPACにアクセスした。

「あ、遅かつたな」

カウンターに戻ると先輩は笑顔で手を振ってくれたが、すぐに首を傾げた。

「新聞、見つけられなかったか?」

「いや……新聞はあつたんですけど……」

一枚の葉をひらひらと揺らしながら、降参とばかりにメモを先輩に差し出した。

「このタイトルの本、ここには無いみたいで」

OPACで何度検索してもヒットしない。漢字や送り仮名を変え

てみたり、言葉を短く区切ってみてもダメだった。自分一人で見つけたかったのに、結局先輩に頼ってしまったのが悔しい。

「本、ていうか、論文だろ、これ」

「論文?なんでわかるんですか?」

「なんでって……番号ついてるし、ページ数と出版年もついてるし。」

あ、C i n i i は見てない?」

「さいにーってなんですか?」

あまり聞き覚えのない響きだ。

「サイニリーサーチ。論文とか本とかいろいろ、一括で調べられるやつ」

そう言っ、先輩はパソコンの画面に表示させたOPACの検索窓に、メモのとおり長いタイトルを入力していった。そして、検索ボタンではなく、真下にあるC i n i i というボタンをクリックして……

つつく